金蔵山古墳

― 後円部墳端の調査 ―

2008

岡山市教育委員会

上段斜面・中段テラス断面（南から）

墳端埴輪列（南から）

序

岡山県の南部に位置する岡山市は、緑の山々と広い平野からなる土地に市域がひろがります。ここはかつて吉備と呼ばれた地域の中心部にあたり、市内には古い歴史を反映して数多くの文化財が残されています。とりわけ、古墳時代のこの地域の隆盛を物語る古墳は、造山古墳を筆頭に数多くが知られています。

市街地近郊に所在し身近な里山として市民に親しまれている操山には数多くの古墳が築かれており、古墳の野外博物館ともいえる景観をなしています。そのなかの一基、金蔵山古墳は墳丘の全長１６５メートルを測り、それが造られた古墳時代中期前半には中四国・九州において最大規模をもつ大形の古墳です。

ここで報告する調査は、自然崩落に対応するためのごく小規模な調査でありますが、墳丘斜面や端部の構造の解明という学術的に大きな成果を得ることができました。

この成果が今後の文化財保護・研究に役立てば幸いです。

最後になりましたが、調査に際してご協力いただいた地権者、関係の方々に篤くお礼申し上げます。

平成20年３月31日

岡山市教育委員会
教育長　山根　文男

例　言

1　本書は岡山市教育委員会文化財課が実施した金蔵山古墳発掘調査の報告書である。

2　本書の作成は岡山市教育委員会が実施し、遺物の実測等及び執筆は宇垣匡雅が、遺物の写真撮影を安川満が担当した。

3　埴輪資料の一部は岡山大学文学部考古学研究室所蔵品を許可を得て実測・掲載したものである。

4　この報告書において用いている方位は磁北である。

5　図1は国土交通省国土地理院発行の 25,000 分の1地図「岡山南部」を複製・加筆したものである。

6　3に示した以外の遺物、実測図、写真等は岡山市教育委員会で保管している。

目　次

1．調査の経過 …… 1

2．調査区の位置と現状 …… 3

3．遺構の概要 …… 3
　1）墳丘の調査 …… 3
　2）上段斜面～中段テラスの構造 …… 3
　3）墳端の構造 …… 5
　4）埴輪列 …… 7
　5）小結－外表施設の構造－ …… 7

4．出土遺物 …… 9
　1）円筒埴輪 …… 9
　2）形象埴輪 …… 14
　3）埴輪の規格 …… 15

5．調査のまとめ …… 16

図 目 次

図１　旭川下流域の主要な遺跡（1/50,000）…… 2
図２　金蔵山古墳墳丘（1/1,400）…… 4
図３　調査区の位置（1/300）…… 4
図４　墳丘断面（1/150）…… 6
図５　上段斜面・中段テラス断面（1/30）…… 6
図６　墳端施設・埴輪列（1/30）…… 8
図７　埴輪（１）…… 10
図８　埴輪（２）…… 11
図９　埴輪（３）…… 12
図10　埴輪（４）・土器 …… 13
図11　出土埴輪の比較（1/6）…… 14

図版目次

巻頭図版　上段斜面・中段テラス断面（南から）
　　墳端埴輪列（南から）

図版１　金蔵山古墳遠景（北西から）
　　調査域全景（西から）
　　調査前の状況（南から）
図版２　埴輪列と墳端施設（南から）
　　埴輪列・上層葺石前端（南から）
　　埴輪列（西から）
図版３　埴輪列と石敷（東から）
　　埴輪西側石敷（西から）
　　上段斜面（南から）
図版４　円筒埴輪３
図版５　円筒埴輪15
図版６　円筒埴輪
　　方形刺突拡大（円筒埴輪21）
　　形象埴輪

1．調査の経過

金蔵山古墳は岡山市街地の東側に所在する操山丘陵に築かれた大形の前方後円墳である。墳丘全長165m、後円部径100mを測り、中期前葉で中四国最大の墳丘規模を有する。1953（昭和28）年に発掘調査が実施され、後円部に設けられた中央石室・南石室とそれぞれに設けられた方形の埴輪区画が調査された。中央石室は過去の発掘によって大きく損壊を受けていたが、それに伴う副室からは多種類の鉄器を納めた埴製容器が出土した。このほか玉類、緑形石破片、碧玉製大刀環頭など豊富な副葬品をしのばせる多量の遺物が出土している。また、埴輪方形区画には円筒埴輪のほかに蓋・盾などの器財埴輪が用いられており、他に家・短甲・囲形なども出土している。

発掘調査によって内容が判明した数少ない大形前方後円墳の一つであり、また、その墳丘規模と豊富な副葬品などによって吉備を代表する中期古墳の一つとして扱われている。

なお、本墳をとりまく地理的・歴史的環境については岡山市教育委員会2007年『神宮寺山古墳・網浜茶臼山古墳』で述べられているため割愛した。標記報告書を参照願いたい。

調査のきっかけは市内遺跡の撮影のため金蔵山古墳におもむいた際、露出した円筒埴輪を発見したことによる。ほぼ垂直の畑法面に円筒埴輪の片側が露呈した状態であった。盗難や自然崩落のおそれが考えられるとともに、所在位置から墳端をめぐる埴輪列の一部と推定できたが、間隔が広い埴輪列であった場合には、この埴輪は後円部西側の墳端に残った数少ないものであり、その位置の把握が重要であると判断された。このため、小規模な発掘調査を実施し埴輪の取り上げをおこなうこととした。

調査地は岡山市沢田字竜王1062である。
調査は2000（平成12）年5月9日に着手し、5月18日に終了した。
調査は宇垣匡雅が担当し、乗岡実の協力を得た。

調査は畑法面の清掃から着手した。清掃の結果、埴輪は地山を溝状に掘削した部分に所在することが明らかとなり、後述の二重の葺石と埴輪との関係を把握することが可能であった。上層葺石上面の状況を把握するため長さ1.7m、幅70cmの調査区を設定し、流土および崩落した葺石の除去を行ったところ新たに埴輪が検出され、埴輪列は口縁を接して並べられた密なものであること、上層葺石の状況が埴輪列の内側と外側で異なることなどが判明した。実測等の後、検出した2点の埴輪と奥側3本目の一部の取り上げを行った。

また、土地所有者服部伯市氏の快諾が得られたため、上記の作業に並行して金蔵山古墳墳丘断面となる畑の法面の実測作業を実施した。この作業の後、埋め戻しを行って調査を終了した。

調査にあたっては服部伯市氏および松本友彦氏から多くのご協力をいただいた。また、測量杭の設置にあたり岡山大学埋蔵文化財調査研究センター野崎貴博・光本順氏の助力を得た。

本墳は墳端付近が標高100mにあたるが、部分的な調査であったため、かつての調査の際の基準高を用い墳丘図と整合させることとしたが、その復元は困難であるため、墳丘断面図から基準高にほぼ等しいと見込まれる南石室天井石下面を0高とし、それからのマイナス高を用いた。

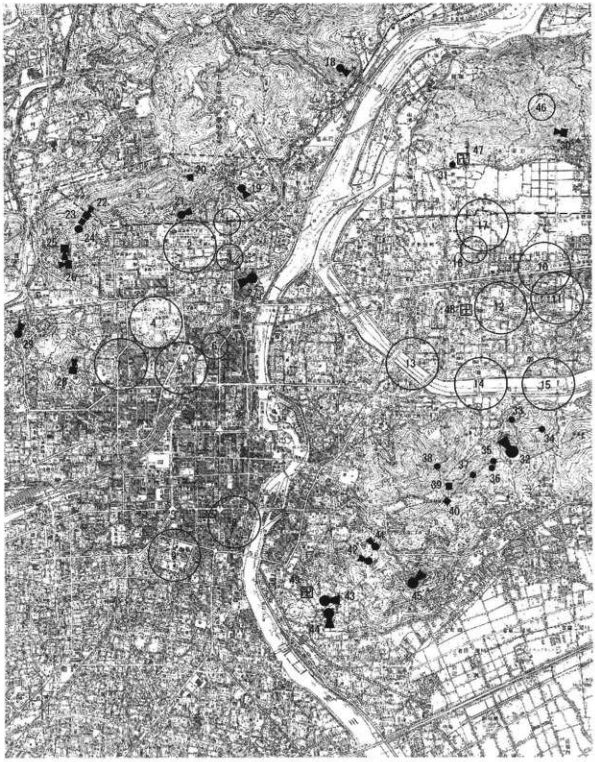


図１　旭川下流域平野の主要な遺跡（1/50,000）

1 朝寝鼻貝塚　2 津島岡大遺跡　3 津島江道遺跡　4 津島遺跡　5 南方遺跡　6 南方釜田遺跡　7 上伊福遺跡
8 天瀬遺跡　9 鹿田遺跡　10 雄町遺跡　11 乙多見遺跡　12 赤田東遺跡　13 百間川原尾島遺跡　14 百間川沢田遺跡
15 百間川兼基・百間川今谷遺跡　16 中井三反田遺跡　17 備前国府関連遺跡　18 片山古墳　19 一本松古墳
20 ダイミ山古墳　21 塚の本古墳　22 都月坂１号墳　23 都月坂２号墳　24 都月坂３号墳　25 七つ抜１号墳
26 七つ抜５号墳　27 神宮寺山古墳　28 津倉古墳　29 青陵古墳　30 備前車塚古墳　31 唐人塚古墳　32 金蔵山古墳
33 沢田大塚古墳　34 操山51号墳　35 操山21号墳　36 二又古墳　37 八景岩古墳　38 萩の塚古墳　39 護国神社裏山古墳
40 旅振台古墳　41 操山103号墳　42 操山106号墳　43 網浜茶臼山古墳　44 操山109号墳　45 湊茶臼山古墳
46 竜ノ口古墳群　47 貫田廃寺　48 蟠多廃寺　49 網浜廃寺　　点線＝古代山陽道（推定）

2．調査区の位置と現状

調査区を設置した柿畑は後円部の南西部からその下方・西側に長く広がっており、調査位置はその北辺の法面にあたる。畑の北辺は後円部東西軸線に対してやや斜交し、上段斜面の基部付近からはじまり、墳端をへて西の墳丘外側へ延びている。したがって、やや斜交するがこの法面はおおむね後円部横断面を示すことになる。後円部畑法面の高さは東端で2.5m、墳端付近で90cmを測る。畑の東および北外側の墳丘部分は山林、竹林となっているが、調査した畑法面上方（北側）には溝状の掘削や狭い平坦部が見られ、過去に畑として利用されたことがあったようである。

金蔵山古墳は東西にのびる山並みの頂部に後円部を置き、そこから北西に派生する短い尾根を利用して前方部を設ける大形古墳である。東西にのびる鞍部は西側の方が東側よりも高いため、後円部の墳端は西側が東側よりも約3m高くなり、墳端全体で最も高い位置となる。

なお、土地所有者服部氏の話によればかつてこの畑を拓いた際、下方斜面部で須恵器高杯が出土したとのことであり、後期の横穴式石室墳が所在したとみられる。

3．遺構の概要

1）墳丘の調査

上記畑の法面を実測したのが図4である。畑であるため現状のままで実測を行ったが、法面上端、畑の肩部は流出や小径状になっているため奥（北）側よりもやや低くなっている。破線で示したのが実測部分の地表、その上側の実線がやや奥側の地表を見通したものである。

上段斜面と中段テラスとの境界部分は保存状態が良く、現状の傾斜変換点Bと後述の下部葺石基底石Aはほぼ一致する。中段テラスの西半は小規模な畑によって削平されているため本来の肩部は遺存していない。地表の傾斜変換点C・Dがその位置をおおむね反映しているとみられる。中段の斜面には葺石が見られないが北側の斜面の保存状態はよく、法面付近の葺石が抜け落ちているとみられる。その下方のF－G間は地山の傾斜がごくわずかになっており、下段テラスを反映したものとみられ、緩斜面部H－Eが本来の形状を示す可能性が強い。特にHは保存状態が良いようで、後述の下段斜面葺石の傾斜の延長上に近い。

なお、この断面に見られる墳丘部はすべて地山・花崗岩の風化土で盛土は認められず、地山の削り出しによって形成されたことを示している。地山は風化しているとはいえ半ば組織をとどめて堅く、墳端付近では1mないしそれ以上の巨岩を含んでいる。

2）上段斜面～中段テラスの構造

法面の上部、東端部では上段斜面からその下側のテラスにかけての構造を把握することができた（図5）。

上段斜面下部には長さ25cm前後、大きいもので40cmの角礫が上方にむかって続いており、後述のように上下2層からなる葺石のうち、下層葺石にあたる。石材の間隔は密で使用石材は大きく、石垣状に組まれているとみてよい。なお、図5東端に断面で示した石材は畑の石垣に組み直された石材である。

この下層葺石は厚さ40cmの角礫・円礫層に覆われる。礫の量はきわめて多くかつ密である。礫の大きさや状況から3層に区分できるとはいえ分層も容易ではなく、この断面の情報のみで原位置を保つものとそうでないものを区分することはむずかしい。1層の上部には埴輪片が含まれており

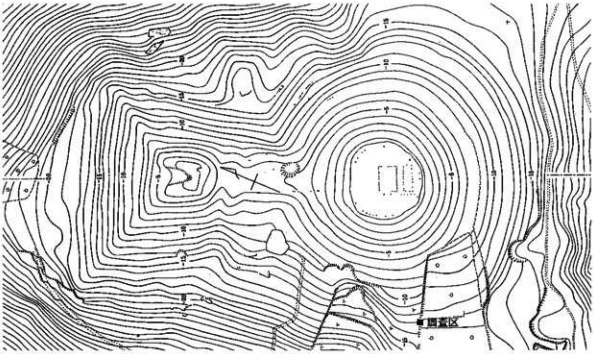


図２　金蔵山古墳墳丘（1/1400）

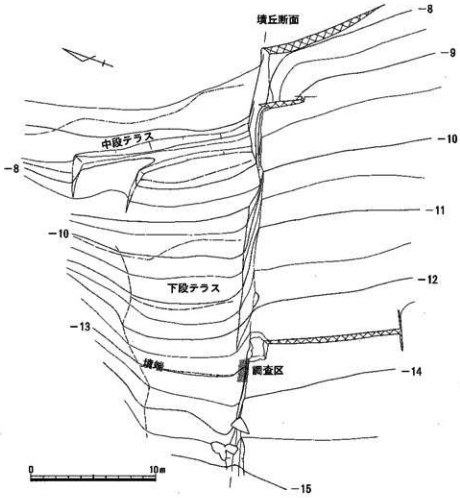


図３　調査区の位置（1/300）

少なくともそれまでが上方からの堆積と判断できるにすぎない。角礫・円礫（図中トーンで表示）の量がきわめて多いとはいえ、断面全体の状況は後述の墳端部のそれと同一であることからすれば、これらは上層葺石と、それが崩落・堆積したものとみてよい。断面東半の斜面部では長さ4～10cmの礫が主体で、上部はやや土の量が多く、一方、西半のテラス上では長さ10～18cmの礫が密に堆積している。下層葺石の上20cm程度が本来の上層葺石、それより上は崩落した上層葺石の堆積である可能性が考えられ、西半部はテラス上に崩落した葺石の堆積とみられる。

テラスではこの堆積層下には最大10cm、平均5cm前後の板状の角礫が認められる。上層と異なり円礫をまじえず、石材がほぼ水平をなしており、角礫敷きが設けられているとみられる。断面に現れた石材の量から見て、密な石敷きではなく墳端埴輪列外側と同程度と推定できる。

これらの下側、地山までの間の5・6層は置土、整地層と判断できる。

3）墳端の構造

墳端部では葺石の構造およびそれらと埴輪の関係を把握することができた。これはこの部分の墳端が溝の中に構築されており、そのため流出を生じなかったためである。以下、判明した構築順に記載する（図6）。

1．　構築にあたって、幅2.4m、深さ70cmの溝を掘り込む。西側は段掘りでテラスをもち、下部は急角度の掘り込みとなる。底面幅は87cmである。溝の西肩部11層は流土にきわめて近いが埴輪片や礫を含んでおらず、長年にわたって風化や根の影響を受けた地山と判断した。この上には薄く表土層が乗るだけであり、本来はもう少し高さがあった可能性が強い。

2．　置き土（10層）ののち、下層葺石を設置する。図6－3断面下部の大形石材がそれで、幅20cm前後で厚みのある花崗岩角礫が使用されている。図の下部に破線で示しているのは石材が抜け落ちた痕であり、本来はこの奥側の石材の一部がかくれることになる。上層葺石の除去を最低限にとどめたため、下層葺石の組み方は埴輪下方の部分（図6－1）で確認したのみであるが、全般に横長に石材を配するようである。基部には長さ55cmの石材を溝底西端に合わせるように置きそこから斜めに石を組んでいく。石材の上面をそろえて組んであり、大形石材の間には小形の角礫を配している。

3．　下層葺石基部を埋め、埴輪を置いてさらに下層葺石下端を埋めて（7・8層）埴輪を固定する。

4．　埴輪列の西側に礫敷きを設ける。長さ10cm前後の角礫が使用されており、敷き方はややまばらである。後述のように埴輪列は北にむかって緩やかに下降するが、それに対応して礫敷きも北側に下降しており、50cmの間で9cm下がっている。

一方、埴輪列の東側には円礫と角礫を用いた石敷きを設ける。石材は密に置かれ2石が重なり10cmの厚さをもつ。角礫を下に置き円礫をその上に敷いている。埴輪列の東28cmまでこれが水平にのび、そこから上層葺石となる。

上層葺石の前端には長さ15cm前後と石敷きに用いられるものよりもやや大きな角礫が用いられ、調査区奥（北）側では3段に積まれて約60°と急角度の面をなし、前（南）側では円礫と角礫が45°の斜面をなす。これよりも上方は流出しているが、埴輪列との間に崩落した石材の量からみてこのままの角度で上に続くとは考えにくく、残存部のやや上で前端の石組みは終わりそれよりも上方では浅い角度となり下層葺石を覆う程度になるのではないかと推定される。上層葺石の前端は下層葺石とかなり離れて設置されるため、この付近では厚さ20～30cmの葺石層（6層）として下層葺石を覆う。

上層葺石に用いられる石材は上記の前端部でやや大きめの角礫が多いが、奥の控え積み

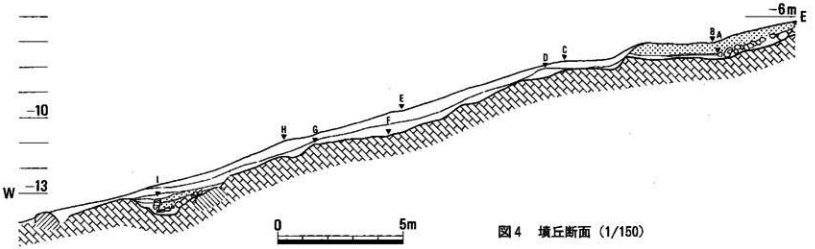


図4　墳丘断面（1/150）

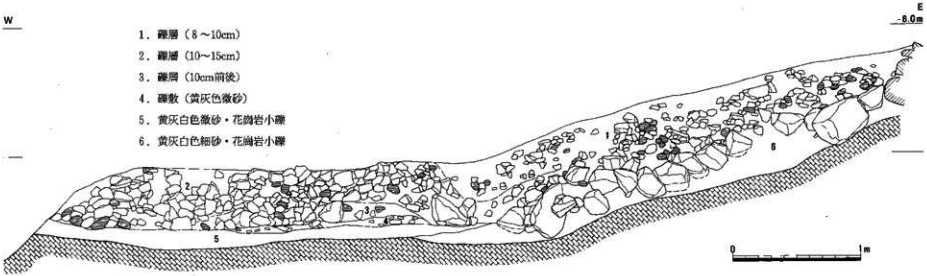


図5　上段斜面・中段テラス断面（1/30）

（図4　上部網カケ部分詳細）

部分では8～10cmの円礫が主体を占める。

以上が構築の状況である。

5.　埴輪列と上層葺石前端との間には崩落した葺石が堆積しており、その間には埴輪片が多数出土した。埴輪列の西側では埴輪片・礫の出土は少なく、上方からの落下物は埴輪列にさえぎられることになったとみてよい。また、後述の埴輪A上部の破片は大部分が埴輪内部に、北東側の一部が東下側に落下しており、埴輪Bの上部もそれに似た状況であり、埴輪列の西側は比較的早く埋まった可能性がある。

4）埴輪列

埴輪基部突帯のやや上側まで埋められて礫が敷かれるため、2段目の半ば以上が地上に表れる。検出状況では埴輪の間に3cm前後の隙間があるが、本来は口縁部を接して並べられていたとみてよい。南から順に埴輪A、B、Cと呼ぶが、透かし孔の軸線は埴輪列軸線の北に対して順に150°、30°、100°Wとなる。つまり、埴輪Cは透かし孔を列に対してほぼ直交させるが、BとAはそれぞれ隣接する埴輪に向くことになり、孔はわずかにしか見えないことになる。

埴輪B内部には角礫と円礫3点が重なって入っている。礫と埴輪の間にはこの個体の口縁部片が落ち込んでいるが礫の間には入らない。また、図6－4　A断面の3・4層は堅くしまった花崗岩風化土で3層がやや暗い色調をもつことからみて、外側と同様3層まで埋め戻された後、角礫が固定のために入れられ、後に上部の破片が落ち込んだ可能性が考えられ、3層は設置後に根や落ち葉によって表土状になったと推定される。なお、4層下部から朝顔形埴輪頸部の突帯とみられる破片19が出土したが、これは他の個体の破片が埋め土に混入した可能性を考えている。

一方、埴輪Aはそれとは状況が異なる。内部には多量の埴輪片が落ち込んでおり、図6－7の2層は流入土とみてよい。埴輪Bと同様に土が入れられたとすれば4層は埋め土となるべきであるが、この層の中位からもこの個体の口縁部片が出土しており、4層の下部までしか埋められなかったことになる。埋め土が少なかったのか、下方の埋め土が十分でなく埋め土が陥没したかのいずれかと考えざるをえない。落ち込んでいる埴輪片の多くはこの個体の破片であるが別個体の破片もまとまって出土しており、これは埴輪Aの南側に所在した個体Zの破片とみられる。

復元される埴輪列の上端は北側にむかって緩やかに下降しており、墳端の下降に対応する。

5）小結－外表施設の構造－

以上のように墳端および上段斜面・テラスの構造はほぼ等しい。すなわち、斜面の葺石は大形石材で組まれた下層葺石の上に小形の角礫・円礫を用いた上層葺石を設け、テラス部分には角礫敷きを設ける。これが金蔵山古墳の外表構造である。上層葺石の保存状態は斜面の下端以外では良くないと推定され、後円部南側斜面の登り道の路面に見られる葺石は下層葺石である。最も状態のよい墳端埴輪列東側の石敷でのありかたからみて、円礫は外表の装飾として使用されたとみられる。古墳時代中期の旭川の位置は明確ではないが、古墳の北西に位置する旭川河岸から長距離の搬入を行ったとみてよい。

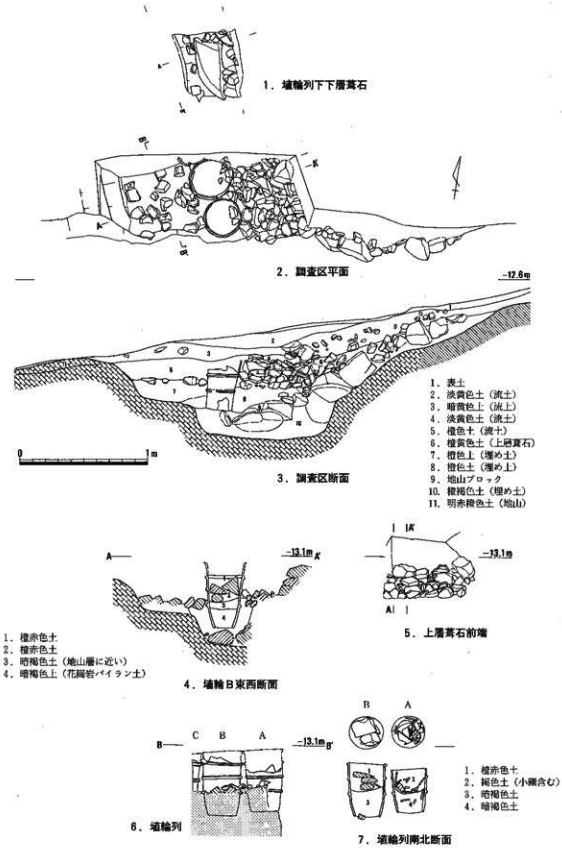


図6　墳端施設・埴輪列（1/30）

4．出土遺物

調査区からは2点の埴輪の取り上げを行ったが、他に流土中から小片がある程度出土している。このほかこれまでに表採された資料や調査中に採集したものをあわせて掲載する。出土・採集の遺物は円筒埴輪・形象埴輪である（図7～10)。

1）円筒埴輪

1は埴輪列南端の個体Aの内側上部に形成された堆積土中から出土したものである。破片がまとまり口縁部付近がある程度復元できることからみて、Aの南にかつて所在し、畑の造成によって失われた個体Zの上部が転落したものと推定される。上端復元径29.8cmを測り、口縁部はわずかに外反する。突帯の下側に半円形の透かし孔を設ける。2は流土出土の破片で、色調から同一個体の可能性が考えられる。

3は埴輪列南端の個体Aである。器高51.2cm、上端径31.4cm、基部径21.4cm、第1突帯上端までの高さ16.7cmを測る。3本の突帯をめぐらせ図示した側では基部と第3段に円形透かしを施すが、反対側では第3段にのみ隅丸台形の透かし孔を施す。外面調整は一次調整のタテハケのみである。内面調整は上部が斜めのハケ、それ以下はユビオサエと部分的なタテハケである。基部突帯の貼り付け面には方形刺突が認められる。方形刺突は幅1.0cm、長さ1.2cmで、2.4～3.4cmの間隔で施されている。赤褐色を呈し、外面には黒斑が見られる。

15が埴輪列南から2本目の個体Bで、器高51.1cm、上端径32.3cm、基部径21.8cm、第1突帯上端までの高さ17.8cmを測る。第3段に半円形の透かし孔一対を施す。口縁部は外反し端面は浅い凹面をなす。3でも見られるが、基部端面には乾燥時に敷かれていた枝の圧痕と推定される凹部が認められる。外面調整は3段目以上がタテハケ、それよりも下は縦方向のナデである。内面調整は上部が斜めのハケ、それ以下が指頭押圧とナデアゲである。橙褐色を呈し外面には黒斑がある。また、部分的に赤色を呈する箇所があり、もとは丹塗りであった可能性がある。

21は埴輪列南から3本目（Bの北）の個体Cの破片で推定上端径32.8cmである。第3段に円形透かしを施す。口縁部端は丸くおさめわずかに外反させている。外面調整はタテハケで、内面調整は斜めのナデである。突帯が剥離した面には方形刺突が認められる。上側突帯部分での刺突間隔は7.5cm前後である。

26は埴輪C内部堆積土中から出土した口縁部付近の破片である。Cの北側に所在するであろうDの破片の可能性がある。外反する口縁部端を上方につまみ上げている。外面全体に黒斑がひろがりその上に赤色顔料が認められる。

19は埴輪15（B）の基部埋め土中から出土した朝顔形埴輪頸部の突帯破片である。混入とは考えにくく、埴輪の設置時に破損した他の個体の破片が入ったとみられる。

4～14・16～18・20・22・23は埴輪列と葺石の間に形成された堆積層、さらにその上方に堆積した流土から出土したもので、14が朝顔形埴輪口縁部端であるほかは円筒埴輪の小破片である。口縁部端5～7はいずれも端部を短く外反させるが、細部の形状はそれぞれ異なる。突帯の断面形は高い台形を基本とするが、形状はある程度のばらつきをもつ。外面の調整はタテハケが主体で、ヨコハケが施されるのは17・18・22・23にすぎない。内面調整は埴輪列の個体と同様、ナデあるいはタテハケである。

なお、これらのうち22・23は胎土・色調から同一個体の可能性が考えられるものである。復元径が34cm前後と大きく、下段あるいは中段テラスに配されていたものと考えてよいだろう。また、24は中段テラス部分で採集した基部の破片で、復元基部径29.0cmを測る。内外面の調整はナデで

4．出土遺物

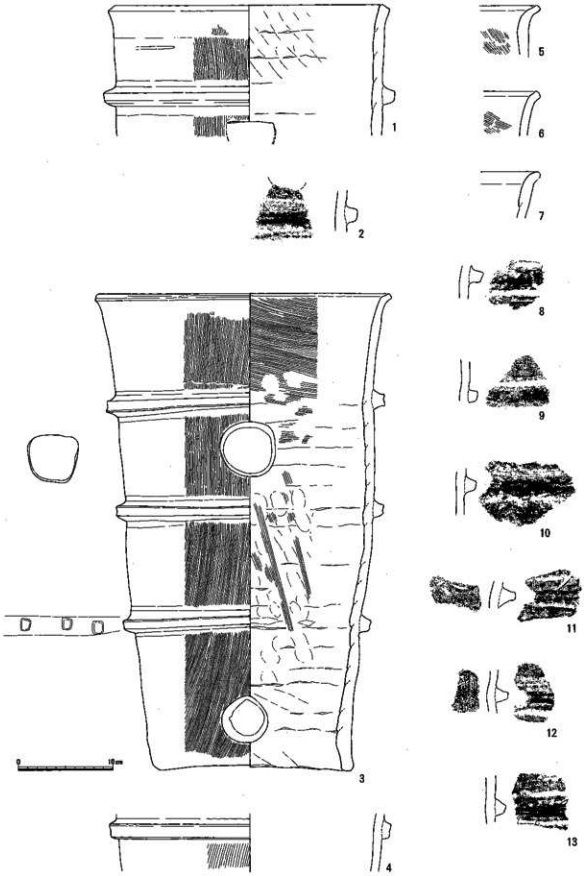


図7　埴輪（1）(1/4)

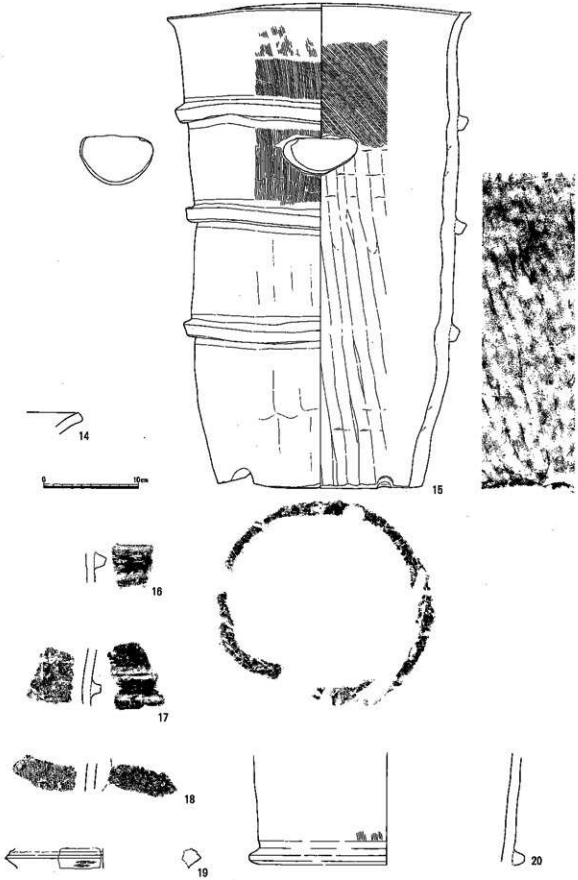


図8　埴輪（2）(1/4)

4．出土遺物

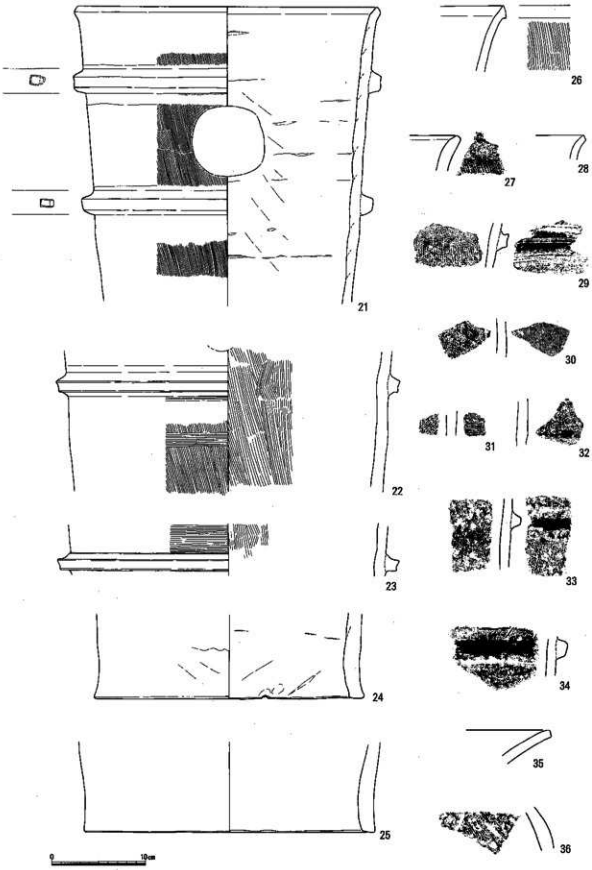
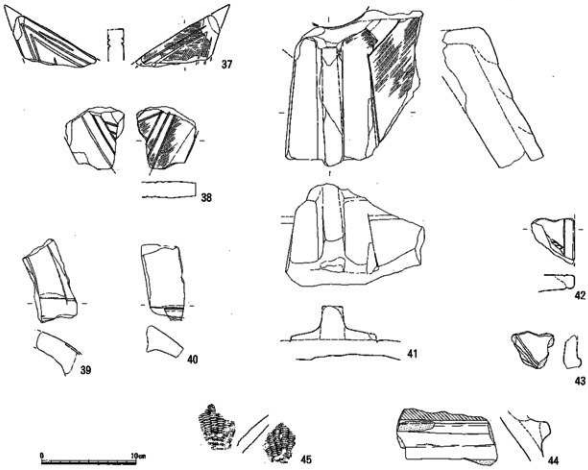


図9　埴輪（3）(1/4)



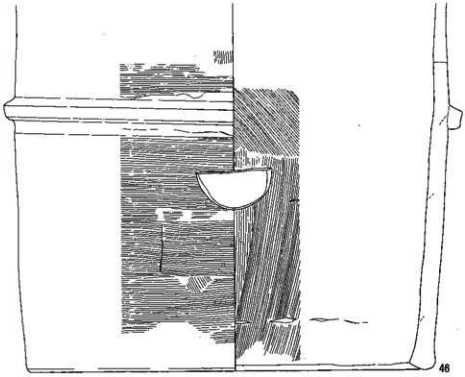


図10　埴輪（4）・土器（1/4）

ある。3・15にくらべて基部がしっかりした作りで断面が方形をなす。中段テラスに配されたものとみられる。

25・27・29～36は墳丘の各所で採集したもので、28は岡山大学所蔵品である。外面タテハケの破片が多く、ヨコハケが施されるのは、後円部東中段テラスの31のみである。口縁部のうち27は器壁の厚さから中型品のそれとみられる。27・29には丹塗りがよく遺存する。35・36は朝顔形埴輪片である。

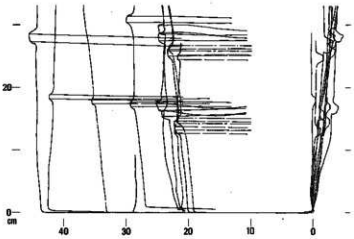


図11　出土埴輪の比較（1/6）

2）形象埴輪

調査域出土の資料は蓋立ち飾り部37・38で、中段平坦面の円礫堆積中から出土した。いずれも保存状態良好な破片で、細かいハケ調整と線刻がよく残る。丹塗りは沈線内に少量しか入っておらず丹塗りの後に施文がなされた可能性がある。38では下端をS字形にくり込んで鰭飾りを形成する。

41は後円部南側下段平坦面で採集した蓋の笠部の破片である。採集時の状況から本来その付近に所在したものではなく、後円部墳頂から転落あるいは投げ落とされたものとみられる。大形の蓋の笠部上端部の破片である。笠部中央から外側にむかって板状の粘土板を貼り、その両側に薄く幅広の粘土板を貼って肋木を表現する。肋木上面部は平坦で、この付近には鰭飾りは設けられていないと判断できる。同様な形状の蓋は発掘調査によって後円部墳頂に設けられた方形区画から出土しているが（西谷・鎌木 1959 第43図2　A S 12）、突帯部の幅は本資料の10cmに対して5cmと小さい。図示はされていないが、報告書では幅15cmの鰭状部分の出土からさらに大形の蓋の存在が推定されており、それがこの個体に相当する可能性が強い。松木武彦氏の分類で庵寺山タイプに属するとみられる。

39・40・42・43は岡山大学所蔵品で、39・40が蓋、41は盾の破片である。39は笠部中央突帯下端から下方にかけての破片であるが、浅い段によって笠部貼布を表現している。笠部下半の水平の分割線はかなり上側に位置している。また、これは横に通り抜けておらず、縦方向に下降する帯が表現されるとみられる。一方、40も笠下半部の破片であるが、太い沈線と細い沈線で笠部を分割する。40がやや確実ではないが、これらは41と同様、庵寺山タイプに属する可能性が強い。

43は形象埴輪とみられる小片で、細い突帯が斜めに貼り付けられているようである。44も不明破片で、直線状の破片である。突帯の上側にも粘土が貼られているが接合部で剥離している。44は後円部中段テラスでの採集である。

46は大形の円筒埴輪基部で、基部径43.4cm、突帯上端までの高さ28.3cmを測る。基部には半円形の透かし孔が設けられており、上の段には90°たがえて透かし孔が設けられる。欠損のため孔の下端が水平をなすという以外不明であり、孔は上向きの半円形、あるいは長方形になると推定される。外面調整はヨコハケ、内面調整はタテハケである。内外面の調整を記した範囲よりも上側は器面の荒れが著しく、地表付近に露出していた可能性がある。

45は後円部頂で採集した笊形土器で、体部下半の破片である。小片であるが遺存状態は良く、内外面に笊の圧痕が残る。

3）埴輪の規格

以上、墳端の埴輪列資料の提示と採集資料の紹介を行った。金蔵山古墳の埴輪の総体を論じるには十分とは言い難いが、これら資料を簡単に整理しておく。

図11には今回の調査で出土した資料と金蔵山古墳調査報告書に掲載された埴輪資料の外形を示した。図では今回の調査資料と墳頂部中央区画を構成するものを実線、南区画出土資料を破線、前方部主体に伴うものを一点破線で示した。

後二者を除外すれば、埴輪は基部径22cm前後の小型、28cm前後の中型、43cmの大型に区分することができる。

小型－墳端　墳端埴輪列に用いられる埴輪は３本突帯４段の小型品である。突帯は幅1.5～2.0cm、高さ1.0cm前後で突出の大きい台形の断面形を基本とする。透かし孔は円形と半円形がほぼ半々の比率で見られる。半円形透かし孔の場合はややいびつなものが多いが、これは孔があまり大きくないことによるのであろう。外面調整は多くが一次調整のタテハケのみで、ヨコハケを施す18が後述の中型品であるとするなら、小型品にはヨコハケは施されない可能性がある。口縁部は端部をわずかに外反させる点で共通するが細部では差異をもち、内外面の調整も差があるが、器高51cm、口径32cm前後と強い規格性をもつ。

注目されるのは３・21に見られる突帯貼り付けに先だって貼り付け位置を決めるための方形刺突が設けられることである。これは大和・山城など畿内中枢部の資料において一般的に見られる技法であるが、吉備においてははじめての確認例である。今後他の資料の確認が必要ではあるが、金蔵山古墳の築造に際して畿内の技法が伝播した可能性が強い。なお、この技法を確認できた資料として岡山市陣場山遺跡出土資料がある。陣場山遺跡からは前期から中期末におよぶ埴輪棺が出土しており、埴輪製作集団の長期にわたる墓域として小墳が築かれていたとみられ、当該資料も棺に転用されて出土している。地点は異なるが金蔵山古墳出土資料とよく似た盾形埴輪も出土しており、両者の関連が注目される。

中型－中段テラス　中段テラスで採集できた24は基部径29cm前後を測り、他に口縁部27、筒部22・23もこれに含めることができると考える。小型品よりもやや器壁も厚く、大ぶりになるとみられる。破片であるため段数や器高については不明と言わざるをえない。

22・23・31などの外面調整からヨコハケがかなりの頻度で施されるとみてよい。

中段テラスに配される埴輪がすべて中型品であったのかどうか、下段テラスにいずれが用いられたのかは推定の域を出ないが、破片の区分がむずかしいものの調査区の流土出土破片に占める中型品の割合が低いようであること、また、そこには下段平坦面の埴輪がかなり含まれているとみられることから、中段－中型、下段・墳端－小型という構成であった可能性を考えておきたい。

大型－墳頂　46は基部径43cmを測る大型品である。墳頂部方形区画を構成する埴輪も大型品を中心に構成されているようであり、この資料は墳頂部の大型品の規格を示す資料とみてよいと考える。

図11に示すように大型品は小型品のほぼ倍の径をもち、小型品の第２突帯の高さを第１突帯の高さとしている。46では基部までヨコハケが施されており、大型品ではヨコハケの使用頻度がさらに高くなる可能性が考えられる。

南石室・前方部の埴輪　小型品の規格は南石室と前方部で大きな差はない。これらを中央区画・墳丘の資料と比較した場合、基部径はやや小さくなる。段幅は中央区画・墳丘の平均12.0cmに対して11.6cmで大きな差はないが、基部の高さが中央区画・墳丘の平均17.2cmに対して15.0cmと低くなるため突帯全体の位置が下にずれることになる。この基部高の相違は、南主体出土資料にＢ種とみられるヨコハケをもつ例があることとあわせ、後円部南主体・前方部主体が後円部中央主体と

ある程度の時期差をもつことを示すとみてよい。なお、南区画出土の完形品（西谷・鎌木 1959 第46図５）では口縁部が長くなっており器高は50.6cmと中央区画・墳丘のものとほぼ等しい高さになる。

これら小型品よりも大きいのは基部径33cmの個体で、これが大型品になるとみられる。なお、基部の高さは小型品と異なり中央区画・墳丘と同一とみられる。

5．調査のまとめ

ごく小規模な調査ではあったが、金蔵山古墳に関しては47年ぶりの発掘調査であり、多くの知見を得ることができた。以下それを列挙してまとめとしたい。

墳端の位置構造を確定できたことで、金蔵山古墳の墳丘規模の一端が明確になった。後円部西側において後円部の高さは14.4m、下段の高さ推定3.1m、同中段3.2m、上段の高さ8.1mを測る。テラス幅は下段５m前後、中段６mとみられる。墳端は地山を溝状に掘削して設けているが、これは後円部西側が操山の尾根線にあたるため墳端位置を低くし他の箇所とそろえるためとみられ、他の部分も同じ構造になるとは考えにくい。

なお、墳端各所の観察にもとづけば、山頂にむかっていくつかの谷が入り込んでいるため、本墳の墳端は墳丘側に大きく湾曲し下段テラスの構築が省略される箇所があるようである。全長160mを越える大形墳を山頂に築き、墳端を整えるためこうした特殊な施工がなされたとみられる。

墳端および上段斜面の調査によって本墳の葺石は角礫面をなす下層葺石と円礫を主体とする上層葺石の二重構造であることが明らかになった。また、埴輪の設置はこの二つの葺石面設置の間になされたことが判明した。

墳端の埴輪列は円筒埴輪の口縁部を接して配置されていたことが明らかになった。良好な埴輪資料であり、この地域の埴輪編年において基準資料となるものである。また、突帯貼り付けに先立つ方形刺突の存在を確認できたことも、畿内中枢からの埴輪製作技法の伝播を考える際の大きな手がかりとなる。

本報告では事実関係の提示にとどまり、他の資料との比較検討は十分に行えなかったが、それについてはいずれ別の機会に果たしたい。

参考文献

西谷真治・鎌木義昌 1959『金蔵山古墳』倉敷考古館研究報告第１冊

松木武彦 1990「蓋形埴輪の変遷と画期－畿内を中心に－」『鳥居前古墳－総括編－』大阪大学文学部考古学研究室

松木武彦 1994「吉備の蓋形埴輪－器財埴輪の地域性研究に関する予察－」『古代吉備』第16集　古代吉備研究会

図版 1

金蔵山古墳遠景（北西から）

調査域全景（西から）

調査前状況（南から）

図版 2

埴輪列と墳端施設（南から）

埴輪列・上層葺石前端（南から）

埴輪列（西から）

埴輪列と石敷（東から）

埴輪西側石敷（西から）

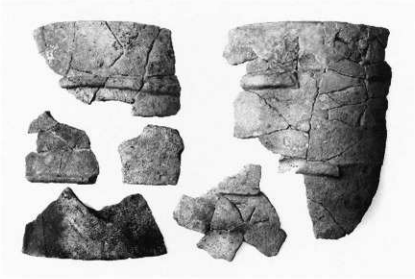
上段斜面（南から）

図版 4

円筒埴輪　3

円筒埴輪　15

図版 6



円筒埴輪

方形刺突拡大（円筒埴輪21）

形象埴輪

報告書抄録

ふりがな	かなくらやまこふん
書名	金蔵山古墳
副書名	後円部墳端の調査
編著者名	宇垣匡雅
編集機関	岡山市教育委員会文化財課　岡山市埋蔵文化財センター
所在地	〒700-8284　岡山市網浜834－1
発行機関	岡山市教育委員会
所在地	〒700-8544　岡山県岡山市大供１丁目１番１号
発行年月日	平成20年(2008) 3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
かなくらやまこふん 金蔵山古墳	おかやまけん 岡山県 おかやし 岡山市 さわだあざウゥつかう 沢田字竜王 1062	33201	2329	34° 39′ 44″	133° 58′ 04″	20000509 ～ 20000518	－	自然崩落

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
金蔵山古墳	古墳	古墳時代中期	葺石・埴輪列	円筒埴輪ほか	大形前方後円墳の墳端埴輪列・葺石構造の確認

要約	金蔵山古墳は全長約165ｍを測る大形前方後円墳である。後円部墳端に露呈した埴輪列の調査を行った。埴輪列には石敷きが伴い、また葺石は上下二重の構造になっていることが明らかになった。埴輪列は下層葺石の構築後に設置され、その後に上層葺石が設けられる。

金蔵山古墳

－後円部墳端の調査－

平成20年３月31日

編集　岡山市教育委員会文化財課
　　岡山市埋蔵文化財センター
　　〒700-8284　岡山市網浜834-1　TEL 086-270-5066
発行　岡山市教育委員会
　　〒700-8544　岡山市大供１丁目1-1　TEL 086-803-1000㈹
印刷　株式会社 三門印刷所
　　〒703-8233　岡山市高屋116-7　TEL 086-273-0550

著作権については岡山市教育委員会に属する